馬琴の読本における「然」が後接する漢字語の字音語振り仮名

―狩野文庫蔵本『南総里見八犬伝』を中心として―

倉田 静佳

キーワード：漢字語、「然」、振り仮名、字音語、『南総里見八犬伝』

要 旨

曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』における「然」が後接する漢字語につけられた、字音語振り仮名について、一般的に「漢語」としては呉音から漢音への移行の優勢が常識とされるのに反し、「ゼン」から「ネン」への交替が多くの漢字語において顕著であり、しかもその交替時期は第6・7輯(文政10・11年)を境としていることを明らかにし、それは各語における音連結や文脈には起因せず、筆工の交替による可能性を指摘した。

1. はじめに

前稿[①]において、近世後期の曲亭馬琴の読本における漢語接辞「然」が後接する漢字語と振り仮名について、実態を調査・整理し、その特徴及び問題点を探った。その際に興味深い点として、漢字語「一然」に対する振り仮名として示される字音語のうち、「然」に対して漢音の「ゼン」と呉音の「ネン」の両方が現れ、交替する傾向が見られるものが複数あることに気が付いた。

近世以降における漢字音の交替については、佐藤喜代治（1971）、飛田良文（1968）、田島優（1998）などがあり、漢語全般について、複数の資料を用いての比較検討が行われてきている。馬琴に関しては、深井一郎・水持邦雄（1976）が、『夢想兵衛胡蝶物語』における漢語について触れており、また、漢字語「一然」に対しては、鈴木丹士郎（1969）において、『南総里見八犬伝』における呉音の多用が指摘されている。しかし、近世後期における、「然」に対する漢音読みの「ゼン」、呉音読みの「ネン」の関係に主眼を置いた論考はないようである。

そこで、本稿においては、この字音語振り仮名の交替現象について、傾向のはっきりとしている時期の馬琴の読本作品を取り上げ、考察してみることにしたい。

主資料とするのは、狩野文庫蔵本の『南総里見八犬伝』である。『南総里見八犬伝』を取

り上げるのは、「然」に対して、「ゼン」と「ネン」の両方が表れ、交替が見られるのは、『南総里見八犬伝』においてであり、それ以前の作品のうち私が調査済みの 28 作品においては、ほとんど「ゼン」のみであったからである。また、狩野文庫本を資料として使用する理由は、前稿の調査において翻刻本を使用したが、版本との不照応が目立ったため、直接、版本を資料とするべきであるという認識を強めたこと、また、過去において、狩野文庫本を主な対象資料とした論考が見当たらないことによる。狩野文庫本は、全輯巻揃本であること、そして稿者の所属している東北大学の図書館所蔵のため見ることが比較的容易であること、また、今回はあくまでも漢字語「一然」に限った用例採取であり、幸いにも、その部分においては漢字・振り仮名ともに、大きな損傷は見られなかったこと、以上のような理由により、資料としては適合性を持つと考え使用した。

なお各漢字語に関する処理は、前稿に倣ったので参照されたい。

2. 調査結果及び考察

2. 1. 漢字語「一然」全体における字音語振り仮名の占める割合

狩野文庫蔵『南総里見八犬伝』における、「然」が後接する漢字語の全体における字音語振り仮名の割合を、刊年ごとに分けて示したものが【表 1】である。本稿においては、年代毎の推移を問題とすることもあり、各刊年に合せて輯巻を分けた[②]。

【表 1】

『南総里見八犬傳』輯巻及び刊年		異なり		延べ	
		字音語数(%)	漢字語総数	字音語数(%)	漢字語総数
1.1～5	文化 11 (1814)	9 (75.0)	12	12 (66.7)	18
2.1～5	文化 13 (1816)	11 (73.3)	15	17 (77.3)	22
3.1～5	文政 2 (1819)	9 (64.3)	14	17 (60.7)	28
4.1～5	文政 3 (1820)	14 (73.7)	19	22 (78.6)	28
5.1～5	文政 6 (1823)	17 (85.0)	20	40 (88.9)	45
6.1～5	文政 10 (1827)	12 (75.0)	16	26 (81.3)	32
7.1～4	文政 11 (1828)	10 (62.5)	16	15 (57.7)	26
7.5～7	天保元 (1830)	13 (86.7)	15	16 (88.9)	18
8.1～4	天保 3 (1832)	13 (81.3)	16	21 (80.8)	26
8.5～8	天保 4 (1833)	14 (87.5)	16	20 (87.0)	23
9.1～6	天保 6 (1835)	20 (90.9)	22	39 (88.6)	44

9.7〜12	天保 7（1836）	20（80.0）	25	70（82.4）	85
9.13〜18	天保 8（1837）	14（87.5）	16	26（92.9）	28
9.19〜23	天保 9（1838）	18（78.3）	23	36（76.6）	47
9.24〜28	天保 10（1839）	18（85.7）	22	37（77.1）	48
9.29〜35	天保 11（1840）	31（88.6）	35	67（91.8）	73
9.36〜45	天保 12（1841）	25（89.3）	28	75（94.9）	79
9.46〜53	天保 13（1842）	22（84.6）	26	40（78.4）	51

前稿において、馬琴の読本における「一然」に対する振り仮名としては、字音語のほうが約7割であり、和語の倍以上であることを明らかにしたが、今回の『南総里見八犬伝』における各輯巻の字音語振り仮名の割合を見ても、異なり・延べとも全体的に占める割合の高さが明らかである。しかも、作品の前半よりも後半の方が割合が高くなり、9割を超える輯巻も見られる。

2．2．字音語振り仮名の内訳

本稿において、考察対象とする各漢字語の「然」に対して、漢音「ゼン」および呉音「ネン」のどちらをあてているのかを示したのが、【表2】である。

【表2】

<table>
<tr><th>漢字語数 / 漢字語種</th><th>異なり漢字語数</th><th colspan="2">延べ漢字語数</th></tr>
<tr><td>A．ゼンのみ</td><td>22（29.7%）</td><td>93（15.6%）</td><td rowspan="2">298（50.0%）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">B．ゼンとネン両方</td><td rowspan="2">25（33.8%）</td><td rowspan="2">410（68.8%）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">298（50.0%）</td></tr>
<tr><td>C．ネンのみ</td><td>27（36.5%）</td><td>93（15.6%）</td></tr>
<tr><td>合計</td><td>74語</td><td colspan="2">596語</td></tr>
</table>

この表によると、延べ数としては、「ゼン」と「ネン」が半数ずつの使用であり、異なりでは、A．漢音「ゼン」のみ、B．漢音「ゼン」と呉音「ネン」の両方を使用しているもの、C．呉音「ネン」のみ、に分けると、C群が最も数値が高いが、他とそれほど大きな違いはない。しかし延べ数でみると、B群の漢音および呉音が混在している漢字語が7

割近くと多く、全体的には漢字語「一然」に対する字音語振り仮名には揺れがあることを示す。現代では、漢字語「一然」の読みに、それほど揺れがないと思われる③が、馬琴の『南総里見八犬伝』においては、それ以前の作品と比べても、このような揺れが目立つ。

2．3．字音語振り仮名の変化

『南総里見八犬伝』執筆期間中における、漢字語「一然」の「ゼン」と「ネン」の様相を、刊年ごとにみてみると、【表3】のようになる。

【表3】

『南総里見八犬傳』輯巻数及び刊年		ゼンの漢字語数		ネン漢字語数		ネンの漢字語初出数	ゼンからネンへ変化した漢字語数
		異なり	延べ	異なり	延べ		
1.1〜5	文化11（1814）	8	11	1	1	1	0
2.1〜5	文化13（1816）	10	14	1	3	0	0
3.1〜5	文政2（1819）	9	17	0	0	0	0
4.1〜5	文政3（1820）	13	21	1	1	0	0
5.1〜5	文政6（1823）	16	39	1	1	0	0
6.1〜5	文政10（1827）	7	14	5	12	0	5
7.1〜4	文政11（1828）	3	5	7	10	2	1
7.5〜7	天保元（1830）	5	7	8	9	2	3
8.1〜4	天保3（1832）	6	12	7	9	3	1
8.5〜8	天保4（1833）	4	7	10	13	2	0
9.1〜6	天保6（1835）	6	10	15	29	4	3
9.7〜12	天保7（1836）	9	25	14	45	2	4
9.13〜18	天保8（1837）	4	11	10	15	2	0
9.19〜23	天保9（1838）	5	11	13	25	0	0
9.24〜28	天保10（1839）	4	9	16	28	4	2
9.29〜35	天保11（1840）	13	23	21	44	4	2
9.36〜45	天保12（1841）	12	38	14	37	2	1
9.46〜53	天保13（1842）	15	24	7	16	0	0

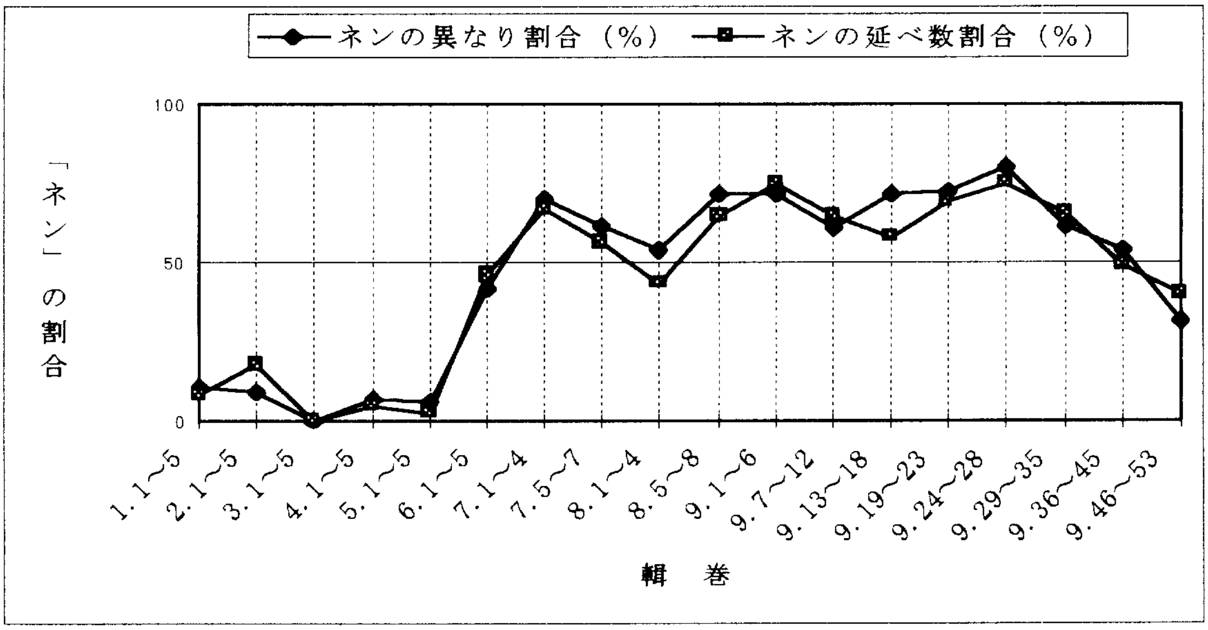
この表が示すように、6輯において、「ネン」の漢字語数が増え、その後の7輯以降は、ほとんど「ゼン」と逆転している。また、それに関連して、「ネン」の初出漢字語も、7輯

以降に目立っている。「ゼン」から「ネン」へ変化した語は、6輯以降にはほぼコンスタントに認められる。

以上のことから、『南総里見八犬伝』における「ゼン」と「ネン」の交替が、6・7輯(文政10・11年)を境に生じていることが明らかである。

【表3】における「ゼン」と「ネン」の交替の様相を、【グラフ1】に表してみると、『南総里見八犬伝』における漢字語の「然」に対しては、元々は少数であった「ネン」が、異なり・延べともに第6輯で急激に増えて、ほぼ「ゼン」と同程度になっている様子が分かる。

【グラフ1】



2．4．字音語振り仮名をもつ漢字語「—然」の実例

次に、【表2】で示したABCの各群における漢字語「—然」の実例を、次頁の【表4】に示す④。一つの漢字語に対し複数の振り仮名がある場合には、数の多いものを先に出している。

A群を見ると、他の語群に比べて、各漢字語の使用数が少ないようである。異なり漢字語数としても22語で、最も少数である。

C群については、異なり27語のうち、1例のみの漢字語がA群の9例と比べて15例もあり、継続的に使用されているわけではないものも多く含まれることが分かる。

B群の漢字語数は、先の【表2】における延べ数が圧倒的に多く、またその内容について【表4】で確認してみれば総数10を超える漢字語が異なりで9語も見られることから

も、圧倒的にその使用数がA・C群より多いことが、両群と比較して明らかである。

【表4】

漢字語	漢字語と字音語振り仮名、および各使用数
A ゼンのみ	忙然（ぼうぜん 19）、未然（みぜん 11）、顕然（げんぜん 8）、当然（たうぜん 8）、偶然（ぐうぜん 7）、泫然（げんぜん 5）、燦然（さんぜん 5）、憮然（ぶぜん 5）、凛然（りんぜん 5）、決然（けつぜん 4）、潸然（さんぜん 3）、茫然（ぼうぜん 2）、必然（ひつぜん 2）、蔚然（いぜん）、豁然（くわつぜん）、激然（げきぜん）、撃然（げきぜん）、傑然（けつぜん）、蒼然（さうぜん）、死然（しぜん）、錚然（しやうぜん）、沛然（はいぜん）
B ゼンとネンの両方	自然（しぜん 91／じねん 1）、忽然（こちねん 60・こつねん 1／こつぜん 16）、突然（とつねん 37／とつぜん 4）、欣然（きんぜん 30／きんねん 5）、愀然（しうねん 25／しうぜん 9）、愕然（がくねん 20／がくぜん 1）、勃然（ぼつねん 10・もつねん 2／ぼつぜん 3）、駭然（がいぜん 7／がいねん 7）、惆然（ちやうねん 7／ちやうぜん 3）、奮然（ふんぜん 6／ふんねん 2）、俄然（がねん 4／がぜん 3）、跫然（きようねん 5／きようぜん 2）、巘然（げんぜん 5／げんねん 1）、振然（しんぜん 5・しんねん 1）、悵然（ちやうぜん 5／ちやうねん 1）、快然（くわいねん 3／くわいぜん 2）、惘然（もうねん 3／もうぜん 2）、安然（あんぜん 2／あんねん 2）、判然（はんぜん 2／はんねん 1）、懜然（ぼうねん 1・まうねん 1／ぼうぜん 1）、瞭然（りやうぜん 2／りやうねん 1）、傲然（ごうぜん 1／ごうねん 1）、聳然（そうぜん 1／しようねん 1）、超然（ちやうぜん 1／ちやうねん 1）、憤然（ふんぜん 1／ふんねん 1）
C ネンのみ	黙然（もくねん 32）、飄然（ひやうねん 11）、端然（たんねん 10）、蹴然（しゆくねん 4）、轟然（くわうねん 3）、公然（こうねん 3）、卒然（そつねん 3）、赧然（たんねん 3）、呆然（ぼうねん 3）、戛然（かつねん 2）、粛然（しようねん 2）、陡然（とうねん 2）、㸃然（こうねん）、衝然（しうねん）、寂然（じやくねん）、静然（せいねん）、悄然（せうねん）、銷然（せうねん）、凋然（ちやうねん）、稠然（ちやうねん）、天然（てんねん）、彪然（ひうねん）、艴然（ふつねん）、本然（ほんねん）、猛然（まうねん）、悠然（ゆうねん）、窅然（ようねん）

次に、以上の語について、「然」の前項の漢字に漢音と呉音、或いは慣用音のどの振り仮名が付くか調べてみたところ、漢音の「ゼン」で後項の漢字を読む場合に呉音、呉音の「ネン」で後項の漢字を読む場合に漢音という異質な組み合わせになるものがある。それら例外的連結と見られるものについて、みていくことにする。

まず、A群の漢音「ゼン」のみに分類される漢字語は、ほとんどが漢音＋漢音、漢呉音両用＋漢音、或いは慣用音＋漢音、の連結型であったのに対し、「未然」及び「泫然」の

みは、前項が呉音形となっている。

次にC群の呉音「ネン」のみに分類される漢字語のうち、「公然、戛然、陡然、駒然、衝然、静然、稠然、艴然、猛然」などは前項の漢字には漢音形がつき、三分の一程度が例外的な使用である。

B群では、7語（突然、欣然、愀然、蹉然、快然、聳然、憤然）が<漢音＋漢音→漢音＋呉音>のように、「然」のみが漢音から呉音へと変化しているもので、逆に、2語（駭然、惘然）が<呉音＋呉音→呉音＋漢音>のように、呉音から漢音へ入替がされているものである。また、三種の振り仮名を持つ<漢音＋漢音／呉音、呉音＋呉音>に当てはまるものとして、「懜然（ぼう＋ぜん／ねん、まう＋ねん）」がある。これらは音の出自がはっきりしているが、その他にその音の出自が不明なものが2語ある。<漢音＋漢音／呉音、不明＋呉音>の「忽然（こつ＋ぜん／ねん、こち＋ねん）」、そして、<慣用音＋漢音／呉音、不明＋呉音>の「勃然（ぼつ＋ぜん／ねん、もつ＋ねん）」である。また、「粛然」に対する「しようぜん」も、特殊な例といえる⑤。

ABC群を全体的に見てみると、『南総里見八犬伝』における漢字語「一然」に対する字音語振り仮名については、漢音を前接するものが圧倒的に多いこと、そして、漢呉音の別が明確にある場合に、後項の字音交替とともに変化する例は、「自然」など極めて少数であることがわかる。

ちなみに、『南総里見八犬伝』以前の作品において、「呉音＋呉音」をあてられている漢字語は、「黙然」及び「天然」という漢字語の2語だけであり、しかもこの2語はそれで一貫した使用である。例えば「黙然」は、『合類節用集』においても「モクネン」であり、明治期以降の文学作品においても呉音読みが中心のようである。

また、『南総里見八犬伝』において、「忽然」に対し「こちねん」という振り仮名を多くしているのが特徴的であるが、同作品内において「こつねん」という使用も見られるのに、「コツ」という漢音に倣わず、出自のはっきりしない「コチ」である。なお、日葡辞書（1603～04）の用例は、「Cotnen」（コツネン）、『合類節用集』（1680）及び『書言字考節用集』（1860）においては漢音の「コツゼン」である。

2．5．音の交替における方向性など

前掲の【表4】において、交替が問題となるB群に分類された語群を、「然」に対して漢音と呉音、どちらのほうが優勢であるかという視点からまとめたものが、次頁の【表5】となる。

【表5】

b 1．漢音優勢　異なり8語、延べ159語
自然（しぜん 91／じねん 1）、欣然（きんぜん 30／きんねん 5）、奮然（ふんぜん 6／ふんねん 2）、儼然（げんぜん 5／げんねん 1）、振然（しんぜん 5・しんねん 1）、悵然（ちやうぜん 5／ちやうねん 1）、判然（はんぜん 2／はんねん 1）、瞭然（りやうぜん 2／りやうねん 1）
b 2．呉音優勢　異なり11語、延べ225語
忽然（こちねん 60・こつねん 1／こつぜん 16）、突然（とつねん 37／とつぜん 4）、愀然（しうねん 25／しうぜん 9）、愕然（がくねん 20／がくぜん 1）、勃然（ぼつねん 10・もつねん 2／ぼつぜん 3）、惆然（ちやうねん 7／ちやうぜん 3）、俄然（がねん 4／がぜん 3）、跫然（きようねん 5／きようぜん 2）、快然（くわいねん 3／くわいぜん 2）、惘然（もうねん 3／もうぜん 2）、懜然（ぼうねん 1・まうねん 1／ばうぜん 1）
b 3．同程度　異なり6語、延べ26語
駭然（がいぜん 7／がいねん 7）、安然（あんぜん 2／あんねん 2）、傲然（ごうぜん 1／ごうねん 1）、聳然（そうぜん 1／しようねん 1）、超然（ちやうぜん 1／ちやうねん 1）、憤然（ふんぜん 1／ふんねん 1）

この表においては、b2 の呉音が優勢である語が最も多い。しかし、この表からだけでは、漢音と呉音とがどのように現れているのかが不明であるため、この【表 5】における語群のうち、音の交替の方向が明確なものを示してみる。

まず、以下の 10 語の漢字語が、漢音から呉音型へと交替するものである。忽然（こつぜん→こちねん・こつねん）、愀然（しうぜん→しうねん）、愕然（がくぜん→がくねん）、跫然（きようぜん→きようねん）、悵然（ちやうぜん→ちやうねん）、快然（くわいぜん→くわいねん）、安然（あんぜん→あんねん）、聳然（そうぜん→しようねん）、超然（ちやうぜん→ちやうねん）、憤然（ふんぜん→ふんねん）。特に、「忽然」や「愕然」などは、交替後の使用数が先の漢音に比べて圧倒的に優位であることが分かり、移行した呉音の方が漢音よりも数値の少ないものは、「悵然」のみである。

【表 4】の分析で行った、前項漢字の字音の結果と照応させてみると、一致する方向の変化は 4 例のみ（愕然、悵然、安然、超然）であり、呉音への移行によって漢字語全体としては不一致度が強くなる傾向がある。

これらとは反対に、呉音から漢音へと交替するものは、奮然（ふんねん→ふんぜん）、傲然（ごうねん→ごうぜん）であり、漢音からの交替に比べて割合として五分の一、異なり 2 語のみであり、極少数である。

2．6．実例から見た、音の交替に因る使用差

ここまで見てきたところでは、漢音と呉音の音交替の原因は、特に考えられなかった。そこで、【表4】のB群について、漢音と呉音という違いが、文脈上の何かに起因しているのか、いくつかの例を挙げて考察してみる。なお、漢字語の該当部分のみに振り仮名をして、読みを示した。

〔自然〕しぜん（91）／じねん（1）

那虎自然（しぜん）と滅息して上下安堵のおもひを做さん（第9輯巻28、3ォ）

名工の旧作祈る随意自然（じねん）と霊あり利益あり（第9輯巻26、15ゥ）

〔忽然〕こつぜん（16）／こちねん（60）・こつねん（1）

玉は犬の瘡口より忽然（こつぜん）顕出て某が手に入れり（第4輯巻4、17ォ）

野猪の手負たりとおぼしきが忽然（こちねん）と駈出て（第6輯巻1、19ゥ）

〔突然〕とつねん（37）／とつぜん（4）

又一個の暴夫突然（とつぜん）と顕れ出て（第5輯巻2、12ォ）

身長より高き茅萱の中より突然（とつねん）と顕れ出て（第9輯巻4、8ゥ）

〔欣然〕きんぜん（30）／きんねん（5）

与四郎はさらなり照文も欣然（きんぜん）と倶に言承したりける（第9輯巻8、15ゥ）

重時は忻然（きんねん）歓びに堪ざれば言承しつゝ退きけり（第9輯巻35下、35ゥ）

〔愕然〕がくねん（20）／がくぜん（1）

兄弟愕然（がくぜん）とうち驚たる目を指して嘆息しつつ（第5輯巻4、22ォ）

皆愕然（がくねん）と目を注して胸安からずぞ思ひける（第9輯巻41、22ォ）

〔駭然〕がいぜん（7）／がいねん（7）

氏元等は又さらに駭然（がいぜん）として舌を巻き（第1輯巻5、7ゥ）

皆駭然（がいねん）と舌を巻く奇談に感嘆したりける（第9輯巻41、15ォ）

これらを見る限り、「ゼン」と「ネン」はほぼ同文脈で使われていて、特に使い分けられてはいないと見做せる。

馬琴の別の作品においても、刊年が複数年度に亘ることにより、その字音語振り仮名の別を顕著にしていることが確認できるものがある。例えば『松浦佐用媛石魂録』（馬琴中編読本集成10、汲古書院）は、前編は文化5年（1808）、後編は文政11年（1828）刊というように、実に20年の間をおいて執筆されたものであり、前編を世に出した後、文化11年（1814）から天保13年（1842）までの期間に執筆された作品が『南総里見八犬伝』であるが、この『松浦佐用媛石魂録』における漢字語「—然」を見てみると、次のような

事例がみられる。

まず「忽然」が、前編では「こつぜん」であるのに対し、後編では「こちねん」、また、「勃然」に対しては、前編が「ぼつぜん」、後編が「もつねん」、といったように、両語ともに、漢音から呉音への変化が見られる。また、変化の無いものとしては、「忙然」が漢音の「ぼうぜん」のままであり、「黙然」は呉音の「もくねん」のままである。これらは、『南総里見八犬伝』における両語の変化と全く一致する傾向であり、文脈的にも違いは認められない。例に挙げた以外の漢字語においても、後編においては「ネン」の型をとるものが増加しているようであり（愕然・公然・愀然・卒然・惆然・天然・猛然など）、『南総里見八犬伝』における文政10・11年すなわち6輯から7輯巻1～4辺りが、字音語振り仮名の交替のポイントと重なる。

3．おわりに

以上、馬琴の『南総里見八犬伝』における漢字語「一然」に対する字音語振り仮名についてみてきた結果は、以下のように整理できよう。

まず、一般的に「漢語」としては呉音から漢音への移行が優勢とされるのに反し、馬琴の『南総里見八犬伝』の字音語振り仮名は、呉音へと向かう傾向が著しく、それは多くの漢字語において認められる変化であった。しかも、その交替時期は6・7輯(文政10・11年)を境としており、その交替は、多くの漢字語においては漢音同士或いは呉音同士といった音連結の型に影響されたものとは言い難く、また文脈による使い分けでもないようであった。

なお、この時期の周辺の作家作品との比較をしてみると、漢字語「一然」に対しては、漢音の「ゼン」を振り仮名としていることが多いように見受けられる[6]。このことは、決して、漢字語「一然」に対する呉音優勢化の傾向が、近世後期全般にわたるわけではないことを示す。

仮にそうだとすれば、それは何故行われたのかという疑問が残る。馬琴の表記意識の変化であったのか、出版事情に関連した現象であるのか、このような可能性に関連し、気になる事項に触れておきたい。

狩野文庫本において、「ネン」が多用される時期には必ず、「谷金川」という筆工が関わっている。この人物は、『近世説美少年録』の頭注[7]によれば、「中川金兵衛の変名。…(中略)…武士であることを憚って変名を用いたのであろう。」とされている。本文でも触れた『松浦佐用媛石魂録』及び『開巻驚奇侠客伝』、『近世説美少年録』・『玉石童子訓』においても、彼が筆工であり、そして、前稿の調査の際に、これら馬琴の執筆期間におけ

る最後半に刊された作品の全てが、字音語振り仮名においては、呉音の割合が高くなっていることが分かっている。以上から考えれば、漢音から呉音への変化には、筆者の馬琴よりも、筆工の関与が大きいという可能性が想定される。

「一然」に対する字音語振り仮名が、呉音形「ーネン」へと変化する傾向が強くなることと同様に、果たして、馬琴作品における他の漢字語についてもそのような事象が認められるのか、またそうだとすれば、それは何に基づくものか、当時一般の状況とも照合しながら、それぞれに相応しい資料を用いて、今後も調べていきたいと考えている。

注

①倉田静佳「馬琴の読本に見られる「然」が後接する漢字語」（『文学・語学』第177号、全国大学国語国文学会）

②例えば、「1.1～5」は、版本における「第1輯巻之1から巻之5」までの範囲であることを示す。

③前稿において採取した馬琴33作品における漢字語「一然」について、『日本国語大辞典』（小学館）及び『広辞苑』（岩波書店）で漢語としての所載を確認してみると、「一然」型漢語に対しては「一ゼン」という漢音形をとる読み方の定着度が高い傾向であるようであった。

④馬琴の表記意識は、その著作において折に触れ述べられている。例えば、随筆『燕石雑志』（1811）において、「字音は、仮名遣いを正さず、傍訓細字にして（中略）わづらはしく、且劂人を労せんことを厭えばなり。よりてシヨウをセウとし、チヤウをテウとする類多かり。」と述べている。このような事情にもより、また、版本の表記のままでは字音語振り仮名表記としてばらつきがあることを考慮し、本稿においては『大漢和辞典』（大修館書店）に記載された字音仮名遣いに統一することにした。

⑤狩野文庫本『南総里見八犬伝』においては、字音語振り仮名（しょうぜん）のついたもの2語については「粛然」であったが、和語振り仮名の「しめやか」に対するものでは「蕭然」が多い。前稿においては、岩波本に倣い「蕭然」に統一処理をしており、また、振り仮名の「しょうぜん」から判断すると、「蕭然」の俗字で草冠を除いただけの字の可能性も捨てきれないが、本稿における調査は字音語対象であるので、今回は、問題となる漢字表記、「粛然」を採用した。結果、これは判定不能であるので、例外的なものとしておきたい。

⑥例えば、馬琴と並び称される山東京伝の『忠臣水滸伝』『安積沼』『優曇華物語』『曙草紙』『昔語稲妻表紙』『善知安方忠義伝』『梅花氷裂』（1799～1807刊）、馬琴続編の『開巻驚奇侠客伝』（第5集、作者は萩園主人、1849刊）、『朝夷巡嶋記』（7～8編、作者は松亭金水、1855・1858刊）においては、「一然」漢字語として41語に字音語振り仮名が付されているが、そのうち、「黙然」「天然」「愁然」の3語のみが呉音形であり、現段階での調査では、馬琴作品と比べると呉音形の割合は低

いといえる。

⑦『近世説美少年録　第1巻』（新編日本古典文学全集、小学館）、249頁。

参考文献

佐藤　喜代治　1971　「近世における漢語の語形変化」『国語語彙の歴史的研究』明治書院

佐藤　喜代治編　1988　『漢字講座 第1巻 漢字とは』明治書院

佐藤　喜代治編　1987　『漢字講座 第3巻 漢字と日本語』明治書院

杉本　つとむ　2001～2003　「江戸の作家とその言語生活 1～29 馬琴、滝沢瑣吉とその言語生活」『国文学 解釈と鑑賞』第66巻2号～第68巻6号

鈴木　丹士郎　1969　「「里見八犬伝」の漢語語彙について」『専修国文』第5号

田島　優　1998　『近代漢字表記語の研究』和泉書院

陳　力衛　2001　『和製漢語の形成とその展開』汲古書院

飛田　良文　1968　「明治大正期における漢音呉音の交替」『近代語研究第2集』武蔵野書院

中田　祝夫編　1972　『講座国語史 第2巻 音韻史・文字史』大修館書店

深井一郎・水持邦雄 1976「「夢想兵衛胡蝶物語」について－近世語研究6」『金沢大学教育学部紀要（人文科学・社会科学編）』第35号

—　東北大学大学院生　—